省エネルギー誌「視点」

「エネルギーを見るということ」

大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所所長　　安達　純

現在のマイカーはプリウスである。この車を、私と妻はかなり気に入っている。それまで乗っていた車に比べて燃費は確かにいいし、パッケージングも優れていて、小型車でありながら大人 4 人がゆったりと座れる。交差点などで停車したときには、エンジン自体も停止する。「静かな車ですねー」と、高速道路の料金所で係りの人から声をかけられることもあり、それをきっかけにちょっとしたコミュニケーションが生まれたりする。

エネルギー・モニターがついていることも、この車の魅力のひとつだ。プリウスに採用されたハイブリッドシステムでは、発進時にはバッテリーに貯えられた電気によってモーターが駆動し、スピードが上がると、その時点でエンジンがかかるようになっている。これはエンジンをできるだけ高回転で効率よく使うためである。そしてブレーキを踏むと、その際生じる熱エネルギーが電気に変換されてバッテリーに貯えられる。こうした車の稼動状況やエネルギーの使用状態が、モニターで一目でわかるようになっているのである。

そうすると、エンジンのかかりをなるべく遅らせようと、ゆっくりアクセルを踏むようになるのが不思議だ。省エネ運転を心がけようという気持ちが自然に湧いてくる。車は、スピードやテクニックを競うことで‘快’が得られるが、省エネ運転を心がけることによっても、それらとは一味違う‘快’を得ることができるのだ。後者の‘快’への入り口が、このエネルギー・モニターなのである。省エネを促進するためには、ハード面とソフト面の両方が必要であるとよく言われるが、この車には、優れたメカニズムとともに省エネ運転を促すような工夫が仕組まれている。

ところで、私どもの研究所では数年前に「市民のエネルギー意識調査」を実施した。その結果によると、全体の 8 割が「ふだんからエネルギーの現状や将来について関心がある」とする一方で、「自分の生活では、無駄なエネルギーを使っていると思う」と答えた人も 6 割に上った。このように私たちの意識と行動には、まだギャップがある。

意識を行動に結びつけるにはどうしたらよいのだろうか。省エネの工夫に関する情報提供や省エネ投資に対する助成の必要性などが指摘されている。もちろんそれも大切だが、もっと基本に戻って、目に見えないエネルギーを見えるようにすることも重要なのではないだろうか。プリウスに装着されたエネルギー・モニターは、エネルギーを‘目に見える’ようにすることの大切さを教えていると思う。

弊研究所のあるメンバーが、自宅を改造して「再生エコハウス」なるものに挑戦している。快適性も確保しつつエネルギー消費を極力抑制しようと、徹底した断熱、太陽光発電、太陽熱給湯の採用など設備の充実とともに、日々の生活にもいろいろと工夫を凝らしている。そうした中でやる気の元になったのは、毎月のエネルギー消費量や換算された炭素排出量をグラフにして眺めることだったという。いま注目されつつある環境家計簿なども、見えないエネルギーを見るための工夫のひとつなのである。